魔法使いは黒猫に横切られる

鴨鶴嘴

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高速道路で不幸な事故に遭った男は、零世界にて謎の龍に、生きたくば叡智を示せ、と問われた。そして、魔法が存在する異世界に飛ばされた男はもといた世界に戻る為、〈叡智の扉〉を求めることになる。その冒険の先には、いつも黒猫の影があるのは何故だろう……。

ちょっと可哀想な冒険譚。

目　次

自動魔道書（オート・グリモワール）（書き足される用語設定集）　1
1話　デッドラインを横切って　5
2話　星降る夜にはご用心　11
3話　春は青だと彼は言う　17
4話　色眼鏡三景モノクローム　27
序章短編　前半　34
序章短編　天上岬　41
勝手にメアレス外伝　I　43
5話　眠れる森のラリドン　48

自動魔道書（オート・グリモワール）（書き足される用語設定集）

1．【クエス＝アリアスと異世界について】

この世界の名は、クエス＝アリアスという。

クエス＝アリアスは無数に存在する世界の内の一つでしかなく、世界は全てで一〇八つあるとされている。世界間では時空間が異なっており、故に観測する手段が限られてくる為、未だに多くの謎が残されている分野でもある。

ではどうやって、クエス＝アリアスの人々が時空間の異なる世界、異世界を知るに至ったのか。

それは偏（ひとえ）に、世界間に干渉するほどの力によって生じた〈歪み〉や〈叡智の扉〉の向こう側から来た者達、異界人の証言によるところが大きい。……異世界の例をあげるなら、異界人曰く、そこは過去の超文明によってプログラミングされていた世界だった。曰く、そこは八百万の神々が御座す世界だった。曰く、そこは塩の大地、終末を迎えた死の世界だった――――と、様々なパワーワードが飛び出す異世界の数々が、存在しているようだ。

2．【〈叡智の扉〉について】

〈叡智の扉〉は、一〇八つあるとされている世界の全てと繋がっている。分かりやすく言えば電子機器のデータを同期させるＷｉ―Ｆｉルーターのようなもので、そんな〈叡智の扉〉には、大小が存在する。

魔法使いが魔法によってカードから呼び出す精霊は〈叡智の扉〉の向こう側からやってくる、と広く知られているが、正確には小さな〈叡智の扉〉から精霊の記憶を引き出す、確立された技術である。

クエス＝アリアスでは年に一度、自然現象で大きな〈叡智の扉〉が開かれる日がある。その日の前後には野生の魔物達の活動が活発になる為、混沌の夜と呼ばれている。

混沌の夜の日に、大きな〈叡智の扉〉は異世界と繋がっている為、異

世界の物や人が〈叡智の扉〉の向こう側からクエス＝アリアスへ来るケースもある。

3．【〈歪み〉について】

〈歪み〉とは、一つと一つの世界が時空間の歪みによって繋がってしまう現象のことである。

時空間の隔たりによって本来は干渉する筈の無い世界間で〈歪み〉が発生する原因は強大な魔力であったり、特異な能力であったり、祭であったり……と様々で、〈歪み〉が発生した際の危険度の高さから、クエス＝アリアスを防衛する境界騎士団という専門の組織と砦が築かれ、異界からの侵入者を撃退するシステムが存在する。

4．【属性について】

■■■□□　　雷
闇■□□光　／　＼
■■■□□　火――水

精霊には必ず属性があり、主に火属性・雷属性・水属性の三つの内のどれかに分けられる。火属性は雷属性に強く、雷属性は水属性に強く、水属性は火属性に強くなっており、三竦みで勢力バランスが保たれている。

精霊の中には主属性の三つの他にもう一つ、複属性を持つ精霊が存在し、複属性は三つの属性に光属性と闇属性を加えた、五つの属性からなっている。光属性は闇属性に強く、闇属性もまた光属性に強い、と拮抗している。主属性に光属性と闇属性を持つ精霊は存在しないが、主属性が光属性と闇属性の魔物は存在する。

属性の相性は主属性が反映されるので、仮に複属性に光属性を持っていて闇属性の攻撃を受けたとしてもダメージ倍率は変わらない。

※ダメージ倍率：有利×1．5　同属×1．0　不利×0．5

5．【精霊について】

精霊には二種類存在し、本精霊と分精霊がある。

分精霊は、異界の人や魔物などの理解を深めることで、〈叡智の扉〉から記憶を引き出し、術者の魔力とカードによって構築、召喚された精霊のことを指す。術者の力量によって精霊の強さは比例する、というのが一般的な見解で、召喚された分精霊の記憶と対話することで、究極的にはオリジナルと等しい百パーセントの能力を再現することが出来る。

本精霊は分精霊の条件に加えて魔物などと直接契約を結ぶことで、〈叡智の扉〉から精神を同調させた精霊を召喚し、そうして自我を持った精霊のことを指す。自我を持った精霊とは具現化する前であるカードの状態でも対話が可能で、本精霊の操る魔法だけを発動することも出来る。

6．【魔物について】

魔物の起源には諸説あり、人類と共に誕生した片割れだとか、魔力が存在する世界意思によって生まれたバランサーだとか、神さまの創造物などと言われているが、実際のところは不明である。

激しい損傷を受けると魔素という魔力の元となる粒子となって大気に還元されることが、研究によって判明している。

動物程度の知性があり、人より賢い個体も中にはいるが、基本的にはとても純粋な生物。その土地の魔力の質などに影響を受けやすく、気質も変化する。

よって、その多くが危険生物に指定されている。

7．【魔法使いについて】

魔法使いとは、魔道士ギルドに認可された、魔法を操る者を指す。

魔法には体系があり、呪文を唱えることで自然や人に干渉する呪術使い。魔素を属性を持つ魔力に変換して放出する魔術使い。魔力で精霊を使役する精霊使い。位置関係によって方向性を持つ大気中の魔素を利用する様式使い……などなど、多岐にわたる魔法技術が混ざり合い、新たな魔法へと昇華している。近年では魔法の複雑化が招く魔法技術の継承失敗による損失を防ぐ為、魔道士ギルドは魔道書（グリモア）に宿

るグリムの養殖化について日夜研究に励んでいる。（今俺が文字を記しているこの本も、その研究の副産物だ。）

魔法使いたるもの人々の奉仕者であるべし、という理念が魔法使いの理想の姿とされている。力に傲って犯罪を犯す者が現れないよう、魔道士ギルドには独立した権限を持つ調査機関が存在している。

1話　デッドラインを横切って

晴れた日には浜松までドライブをするのが、ストレスを発散するのにちょうどいい距離なんだと、昨晩父から聞いていた。

家を出たのは半刻ほど前のことで、カーラジオから流れる流行りのナンバーを口ずさむ位には、ドライブを楽しんでいたと思う。

……それなのに、高速道路での車の故障。アクセルを踏んでも緩やかに減速しているのが速度メーターを見て明らかで、後続の車は堪らず車線を変更して追い越していく。

焦る心を努めて平静に、深呼吸を一つ。ハンドルの操作には問題はなく、路肩に車を停車させてからハザードランプを付けた。

こういうときは、加入しているロードサービスの業者に電話をする必要があったはず。一息つく間もなくダッシュボードの中身を物色していると、誰かがすぐに通報してくれたのか、道路巡回車の人が助手席の窓をノックした。

「走行していたら急に車が減速しまして……」

「エンジンはかかりますか？」

停車と同時に車のエンジンは切っていた。後付けの理由を述べれば故障が原因で火事が起こるのを予防していたとも言えるが、無意識の内での行動だ。

言われて差したままの車のキーを回すが、間抜けな音が鳴るだけで、エンジンがかかる気配は一向になかった。困った顔で助手席側へ振り向く。

「故障ですね。ＪＡＦカードはお持ちですか？」

「カードですか。父がおそらくは、持っていると思います」

「そうですか。ではお父様と今連絡は取れますか」

「かけてみます」

携帯電話を懐から取り出した俺は、着信履歴から父親に電話をかける。

『はい……どうした』

「ああ父さん、実は高速道路で車が故障して――――」

話は無事に済んで助手席側から車を降りた俺は、パイロンを置いてくれた道路巡回員の方に頭を下げて、お礼を述べる。
「ありがとうございました。一時はどうなることかと……」
「いえ。お父様が呼んで下さったＪＡＦの方が来るまでは、ガードレールの外で待っていてください。車内で待つのは事故が起きたときに危ないですからね。それでは」
坦々と注意をすると、黄色い車に乗って去っていった。指示通りに俺はガードレールを跨ぎかけ、ふと思い出して、貴重品と差したままだった車のキーを取りに車内に戻った。
故障と聞いて、廃車になるのかは一度専門家に診てもらわないと分からないことだけれど、故障車の引き継ぎはスムーズな方がいい。暖房を効かせていたから脱いだジャケットも、後部座席のシートにあるままだ。外は寒いし、これから待つ時間も長くなるだろう。
思い返せば、災難だったな。と、いつかは笑い話になる日がくるのだろうか。ジャケットを取ろうと運転席と助手席の隙間、アームレストに脇を乗せて手を伸ばしている。
少し緊張感を欠いていたときに、携帯に着信があったので、俺は急いで応答する。電話の相手は、心配そうな母親の声だった。
『高速で事故したんだって、大丈夫なの!?』
……。父さんは昔から、メールでの説明を端折るきらいがある。取り乱す母親に頭痛を覚えながらもどう切り出すかと逡巡している間、その沈黙を嫌って何度も『もしもし』と繰り返す母親が気の毒で、俺はすぐに返事をした。
「はい、大丈夫だよ。それと、事故じゃなくて車の故障だから」
『何っ、聞こえない!?もう一度言って』
ダメだこりゃ、と苦笑を溢しながら、ふと顔を上げると、リアガラスにうっすらと自分の顔が写っていた。
高速道路で車が停車している後方は緩かなカーブになっているが、車は完全に路肩に出ているので渋滞にもならず、そろそろ注意を促す電光掲示板も出ている頃合いだろう。そう思うと羞恥の心が湧いてくる。……リアガラスに写る自分の頬に、ほんのり赤みがさした気が

する。
『もしもし、もしもし』
「ごめんごめん、聞こえてる？」
『もしもし、もしもし――』
電波が悪い、なんてこと、今日日の携帯電話で起こりうるのだろうか。先程から何度も返事をしても、聞こえている様子がない。……高速道路上だから、もしかしたらあり得るのかもしれない。それともよっぽど気が動転しているとか。母親の心労が祟って、何か起きないか心配になる。
携帯電話を一度耳から離し、何かの拍子で設定を変更してしまったのかを疑ってみたが、何もおかしな点は無かったので、一度電話を切ることにした。
「ごめん、かけ直す」
聞こえているかは定かではないが、一つ断りを入れてから電話を切った。一旦はガードレールの外に出て、それからまたかけ直そうと思いながら。
リアガラスに写る自分の像の、そのさらに奥と自然に焦点が会う。
何故だろう、胸騒ぎがする。
遠くに離れた場所に、異常な光景があった。セメントを積んでいるのだろうミキサー車が、白線の間を揺れているのだ。周りの車は車間をとっている。普通車があんなのにぶつけられたら、一溜まりもないだろう。
――先程から、知覚が研ぎ澄まされている。
俺はこの感覚を覚えている。子供の頃に一度体験しているんだ。
あの日は前日の雨で増水していた用水路の側で自転車の練習をしていたら、よろけた拍子に用水路に落ちてしまって、時間が引き延ばされたような、としか形容し難い奇妙な感覚に襲われたのだ。あのときは、直ぐに飛び込んだ父親が俺を助けてくれた。
そう、この感覚は走馬灯だ。
俺は今、生命の危機に瀕していると、直感が知らせているんだ。
生きたい、その一念で弾けるように動き出した俺は、助手席のドア

を開けて外に飛び出した。睨むように後方を見ると、カーブで大きく右車線に膨らんでしまったミキサー車の運転手がはみ出しにようやく気づいたのか、慌てて左にハンドルを切り、速度を殺していないものだから片輪が浮いてしまっている。このままだと3秒後には横転して、そして、路肩に突っ込んでくる！

自分が轢殺されてしまう死のビションに恐怖し、俺はガードレールの向こう側の、草原と道路との僅かな段差に活路をみた。あそこにたどり着くことさえ出来れば、俺は生き残れるだろう。ガードレール下に飛びついて、段差に手をかけ、体を転がす。……俺は間に合った。間に合ったんだ！

仰向けの状態で、頭の前に構えた腕をずらして後方を確認すると、停車させていた車にミキサー車がぶつかる瞬間で、その衝撃で宙を舞ったミキサー車の部品の一部が、とてつもない質量と速度を持って、俺めがけて一直線に飛来してきた。

瞳孔が縦に裂けんばかりに開かれて、次の瞬間には力が抜けて、俺はもう死ぬんだなと、諦めから達観していた。

――本当に、運がない。さあ、最後には何を想って死のうか。両親には最後に親不孝を、姉はもうすぐ結婚式だったのにな。卒業式で泣いているあの子に近寄れなくて、告白は出来なかった心残り。そうだ、俺が死んだらタマのご飯はいったい誰が――

『生きたいか人間。ならば我にその叡智を示せ』

「＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊」
『これからお前に三つ問い、一つの問いにつき２０秒の考える時間を与える。全てに答えることが出来れば、我の力でお前を生かしてやると約束しよう。挑むか、ここで死ぬか、選ぶがよい』
「＊＊＊……＊＊＊」
『クハハハッ……恐ろしいか？』
「＊＊、＊＊＊＊＊＊」
『そうか。では一つ目の問い。……黄昏色に染まる〝ソイツ〟の頭を私は三度も斬ってバラバラにすると、その内一つを手にとって、皮を剥いで齧りつき、血肉を啜って笑みを浮かべた。満足した私は〝ソイツ〟の残りカスを川に捨てると、足早に橋を去った。……〝ソイツ〟とは何だ？』
「＊＊＊？＊＊＊＊……」
『与えられた時間は２０秒、だ。なぞなぞの答えを考えるには、短いか？死を受け入れるには、十分な時間だろう？時間をどう使うかは、お前次第。あと１０秒……』
「＊＊＊＊＊」
『正解だ。では二つ目の問い。……切り立った崖に両手でぶら下がる、今にも落ちてしまいそうな二人の人間と、そこへ駆けつけたあなたがいる。一方はあなたの母親、もう一方はあなたの恋人。あなたには二人を助けるだけの腕力があるが、しかし崖にぶら下がる二人はもう限界で、一人を助けている間にもう一人は崖の下に落ちて死んでしまうだろう。助けられるのは一人だけ。猶予は２０秒。あなたはどちらを助けるのが正しいか？』
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊！」
『答えようが無いだと、それがお前の答えでいいのか？……全ての物には重さがある。目に見えることが全てでは無く、真実とは、その言葉に真の重さを与えるのだ。あと５秒……』
「……＊＊＊＊＊。＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」
『正解だ。では三つ目の問い。……実は三つ目の問いの答えを、既にお前は答えている。よって契約は成立し、我の力でお前を生かしてや

ろう。……クハハハハッ！久しぶりに愉快だったぞ人間！もう二度と会うこともあるまい。――〈叡智の扉〉の鍵は全て揃った。三体の精霊がお前を異界へと導き、未知なる世界がお前を待ち受けているだろう。長生き出来るかは、お前の選択次第だがな』

「そんなこと、聞いてないんだけどっ!?」

先ほどまで漠然としていた肉体が突然実体化したので、嘆きはそこそこに自分の体を確認する。……良かった、俺の体だ。前より少し若い気もするけれど。気のせいか、張り上げた声も声変わりする前の頃のようだった。

体を確かめている最中も、俺の周辺を火と雷と水が尾を引いて飛び交い、（頭がおかしくなったわけでは無い、と思いたい）足元に発生していた上昇気流が急に強まったかと思うと、体が光子に包みこまれて、抗えない光の奔流に乗って流されていく。

「まだ聞きたいことが――」

光の奔流は一本の道となって、流星が如く速さではるか彼方へと消え去った。

『グルルルルォォ……お前は本当に、運がいい』

ルビーのように妖しく光る眼を細め、獰猛な笑みを浮かべる。黒龍は世界を揺るがす咆哮をし、畳んでいた巨大な翼を広げて飛び立った。

零世界に幾つもの亀裂が走ると、虚は空に。彼方には海が。眼下には陸が。そして虫ケラ共が、わらわらと飛び出してくるではないか……。

一なる世界は、零に還る。黒龍（じゃあく）に翼（じゅう）を与えてはならない――

2話　星降る夜にはご用心

「あの日から20年、か。時間はあっという間だね……」
　石で組まれた窓からは、眼が眩むほど青い空が窺える。この時間はまだ光が多くて観測することは出来ないけれど、そこには〈叡智の扉〉が開いている……。今日はその、年に一度の日。
「アレク殿？また独り言ですか」
　東方のガムシーナという町から魔道具を売りにきた商人の男が、怪訝そうな顔でボクに話しかけてくる。それもその筈、今日はこれで何度目の独り言なのか、自分でさえもわからないのだから。
　らしくないね……。20年という節目の歳月が、ボクを焦らせているのかもしれない。
「ごめんごめん、今は大事な商談の途中だったね。……これが約束の報酬。少し色をつけさせてもらうよ。また新しい魔道具の情報があったら、ボクに教えてよね」
　王都の金貨が報酬の額だけ入った袋に、懐から三枚の金貨を取り出して袋の中に加える。
　こうやって報酬を渡すと、商人の人は喜んでくれるんだ。
「ええ喜んで。アレク殿は話の分かるお方だ。こちらこそ、またよろしくお願いします」
「うん、またね」
　王都ウィトリナ、そこに構える魔道師ギルドのマスターをしているのが、今のボクの肩書きだ。
　別にギルドマスターになろうと思っていたワケでは無い。と言うと、人によっては嫌味に聞こえるかもしれないけれど、ボクには明確な目的があって魔道師ギルドに入り、人や魔道具、情報が集まる王都ウィトリナを拠点にして、様式の魔法を一人で研究していたら、たまたま功績が認められて、ギルドマスターになっていたんだ。
　ギルドマスターという肩書きは、出来ることが増えて気に入っていたんだけど、最近は、縛られているようにも感じるようになった。
　ボクの目的は、〈叡智の扉〉の向こうにある故郷に帰ること。

今は二十年前ほど悲観していないし、強く望んではいないけれど、ボクの果てなき好奇心が、現象の究明をしたいと訴えてくる。ボクは魔道師になるべくして、魔道師になったんだと思う。

今頃黒猫の魔法使いくんは、ボクよりもずっと〈叡智の扉〉の真理に近づいているんだろうなぁ……。

一年前に、ボクと似ている眼をしていた黒猫を連れた魔法使いくんと、出会ったんだ。

あの日はこの眼が彼に特別な何かを感じて、今まで誰にも話したことがなかったボクの身の上話を彼にしてしまったのだけど、彼は〈叡智の扉〉について分かった事があったら、知り得た情報は全て話すと約束してくれた。

あのときはその真っ直ぐな瞳に年甲斐もなく照れてしまったけれど。ウィズ……黒猫のお師匠さんも、彼の本質を見抜いていたんじゃないかな。彼は近い将来、いい精霊魔法使いになれる。

「さて、そろそろ遺跡に出かけないとね」

王都は夜になっても地上の明かりが強すぎる。だから空気中の塵も少ない遺跡まで行くのだけど、馬車で半日もあれば今から十分間に合うだろう。今日の日の為に先行隊も派遣して、入念な準備をしてきたんだ。

王都ウィトリナ、ギルドマスターアレク。

二つ名は、星の様式使い。

「うん、星の魔力がいい感じに満ちてるね。今日は道中、魔物の討伐依頼もこなしちゃおうか！〈土星の魂狩人サテュルネ・ソトン〉、〈木星の超重騎士ユピテス・ジョバ〉、〈蒼き美の明星ヴェニュ・スザンミ〉ボクにその力を、かしてよね」

強く、逞しく、美しい三体の精霊が、索敵して魔物を見つけては屠っていく。その手腕は、見事の一言。

「はえー、流石は王都のギルドマスター殿だ。厄介な魔物がみんな、一撃だぁ……！」

馬車を引く馭者（ぎょしゃ）の男は感嘆のため息を漏らすと、石畳の街道を迷うことなく駆け抜けていった。

◆

光の奔流は開かれた〈叡智の扉〉からこの世界に飛び出して、重力の概念によって急降下をみせた。

落下予測地点は人の気配の無い牧草地だったのは幸いか、大地とぶつかる衝撃による被害は牧草地を抉るに留まった。クレーターからは三色の眩い光が夜に落ちた太陽のようで、光子が崩れて空気中に散っていくと、そこから人の形が現れた。

「地面？……う――――」

長時間の飛行による疲労のせいか、膝から崩れ落ちた俺は意識を手放すと、泥のように眠りだした。

目を覚ましたのは、太陽が空に昇った後だった。

軋む体に鞭打って、鋼の意思で起き上がると、そこは湿った土塊がごろごろしているクレーターの中心で、服は磨り減ってボロボロになっていた。ダメージ加工のファッションと言い訳しても、署までご同行願われてしまうだろう。それぐらいに今の姿は悲惨だ。

「よし、ここから出るか」

クレーターをよじ登って出てみると、牧草地だったのであろう場所に周囲２００ｍぐらいまで土や石が飛び散って、酷い景観になっていた。

自然が豊かな証拠ともいえる、清々しい空気が場違いにおいしいと感じる。

「これって俺のせい、だよな」

登ってきたクレーターを覗き込んで、怖くなって一歩退く。どうしようかと考えて、どこかの誰かにまずは服を恵んでもらおうという方向で指針が決まった。

服の丈はだいぶ余っていて、やはり俺の年齢は十六歳ぐらいに戻っているらしい。その事実から、あの一連の出来事を受け止めなくてはいけないとして、それはさておき、丁度いい長さを決めたらボロボロな服の繊維に沿って二つに裂き、肘のところで帯状になった服を固結

びにした。ズボンの方は、繊維が服より丈夫なので、折り曲げて我慢することにする。
「どこに人がいそうかな？」
牧草地の丘へと歩き遠くを見渡してみると、遠くに森と、道らしきもの。それとよくわからない動物の姿を幾つか確認した。……もしかしたら、俺はかなり危ない場所にいるのかもしれない。人探しは尚のこと急務になった。
動物の影を視認したら遭遇しないように遠回りをして、先ほど見つけた道、馬車の通る街道の傍まで来ていた。この道をどちらかに辿っていけば、おそらく人と会うことは出来るだろう。
さて、西と東。どっちに行こうか。
……東にしよう。なんとなくだけど。
第一歩を歩きだそうとしたときに、ソイツはいきなり現れた。
「……キュィィィイイン!!」
無機物なフォルムに羽の生えた、飛行機のジェットエンジンのような口の赤い化物が、背の高い草の影をから飛び出してきた。なぜだか知らないけれど、とても興奮しているらしい。この化物の縄張りに、知らず知らず入ってしまったのかもしれない。
「は、話は……通じるワケないよねェーー!?」
「キュィィィイイン!!」
「ゆるしてくれって、俺が悪かった！」
西に向かって全速力で走り出した俺の背を追って、タービンの化物が接近してくる。化物の口が吸い込む風を肌に感じると恐ろしくて、あの口に飲み込まれたら、スプラッター映画のワンシーンみたいになってしまうと想像できる。そんなのって、嫌すぎるッ！
チェイスは五分と持たなかった。無尽蔵なスタミナを有していない俺は、足をもつれさせて転ぶと、タービンの化物が眼と鼻の先に迫っていた。
もうダメだ――――次の瞬間、氷の柱がタービンの化物の口に突き刺さった。
〝間一髪だった。動けるならこっちに来て〟

趣のある帽子とローブを着込んでいる優男風に来いと言われて、反射的に駆け寄った。さっきのは何だったんだろう。その疑問は、次の瞬間に氷解した。

〝〈状態異常：睡眠〉、〈肉体強化〉、〈水属性付与〉……詠唱完了〟

「グ、グゴゴゴゴッ……ＺＺＺ」

先ほどまで興奮していた様子のタービンの化物が突然眠りだす異常に目を奪われる。さらに優男風の彼の体が輝きだし、手に持つ杖からは冷気が吹き出していた。

これはまるで、ファンタジーの中だけだと思っていた、魔法使いの姿だ。

〝えいやっ！〟

気の抜ける掛け声と共に杖が振り下ろされると、タービンの化物は硝子が砕けるように粉々になって、光の粒子になると風に乗って飛んでいった。

今のは敵を凍らせて、杖で砕いたんだ……！

「ナァーオゥ！」

彼が連れていた黒猫も、どこか誇らしげに鳴いている。戦闘が終わり魔法使いの下へ黒猫が近づくと、彼はしゃがんでその肩に、器用に黒猫を乗せて立ち上がった。

「ありがとうございました。いきなり襲われて、もうダメかと……」

〝君は一人なの？ここは魔物がでるから危険だよ〟

「そうなんですが……。安全な場所に行こうと、道に沿って逃げていました」

〝その判断は正しいよ。けど、危険だと分かっていて何故？〟

俺は、自分の事情を彼に説明するのは躊躇われた。しかし、命の恩人にその場凌ぎの嘘をつきたくはなかったし、しばらく沈黙を守っていた彼の方も、肩の猫に気をとられているようだった。

〝ワケあり、みたいだね。気が進まないのなら、別に話さなくてもいいよ〟

その一言で、俺は話す決心をすることが出来た。

「いいえ、話します。嘘のような本当の話ですが。自分は、この世界で

は無い場所から来たんです。神さま、とでも呼ぶのが妥当なのか、自分より上位の存在の力によって、この世界に連れてこられたんです」
不安の一部を話してみると、彼は一度驚いて、思案げに手を口元に置き、何度も首を縦に降った。
〝君は、若いのに難しい話の仕方をするんだね。……分かった、まずは君を近くの町まで連れていってあげる〟
彼が懐から一枚のカードを取り出すと、ゆるキャラが現実になったような、巨大な生き物が目の前に現れた。
「ワパー？」
〝この精霊は、ワパパって言うんだ。背中に乗って、大丈夫だから。乗せてもらえば町に早く着ける〟
「……もう、いろいろとお任せします。よろしくお願いします」
常識の枠組みを破壊されて、とっくに俺のキャパをオーバーしている。なるようになれ、難しいことを考えるのを放棄した俺は、ワパパという精霊の背中に飛び乗った。
ゆるキャラな見た目に反して、思っていたよりもずっと固い。これなら安定して座れそうだ。俺が乗ったのを彼は確認すると、ワパパに命令をする。すると、ワパパは自動車ぐらいのスピードで宙を走り出した。加速がとても速くて、後ろによろけそうなのを、なんとか踏ん張ってこらえることが出来た。
「ニャハハハハッ！」
「えっ、猫が笑ってるよ……」
彼の猫が先頭に座って笑っている。猫って笑うっけ。とても頭が痛い。
〝師匠は、楽をするのが好きだからね〟
この人も、なんかズレてるな。と俺は密かに思ったのだった……。
二人と一匹を乗せたワパパは一直線に、港町トルリッカへと向かう。

3話　春は青だと彼は言う

先を歩こうとする俺の肩の上に、手のひらを置かれて振り向く。

〝その格好のままトルリッカの街中に入るのは、あまりオススメ出来ないかな。今着ているもので悪いけれど、このローブを少しの間貸すよ〟

トルリッカの町を視界に収める、まだ途中の街道で、ここまで快適に運んでくれたワパパから下りた理由に合点がいったのと同時に、自分の今の身なりを失念してトルリッカへと行くことばかりに気が向いていた自分が恐ろしいと、肝を冷やした。極端な話、裸の男が町で服を求めることの難易度の高さを再認識し、同性の同行者がいたことはありがたいことだと思った。

「助かります、本当に」

彼の着ていた紺碧の空のような色をしたローブは、正直なところ俺の趣味じゃないけれど、袖を通せば足元まで隠れてくれるのは助かった。服が若干だぼついているが、道行く他人には兄のお下がりを背伸びして着る弟とでも思わせておけばいい。服のことはもう、問題ではなくなった。

トルリッカの、まずは番兵が立つ関所へと進む。

〝緊張してるの？大丈夫、大丈夫だから～、なんてね〟

ガチガチに緊張しているのが動きに出ていたのか、何でもないように笑って言う彼の気さくな言葉に俺は苦笑いで応えて、関所を通過する。

番兵の矢のような視線を浴びたときには覚悟したものだが、呼び止められることはついぞ無かったのでほっとひと安心した。……喉元過ぎればなんとやらで、こんな警備でいいのかと、町の治安が心配になる。

〝彼らは、別に仕事をサボっているわけではないよ〟

「はぁ……そうなんです？」

何か含みのある言い回しに、俺は続く説明を待ってみたが、会話はそこで途切れてしまった。

街中に入ってからというもの、口数も減ってオンとオフが切り替わった様子の彼は、人々の往来の隙間を迷いなく縫って進んでは振り返り、俺はその背に離されまいと追いかけた。

〝この道に入ったら、人も落ち着いてくるんだ〟

「そうですね。それで、この先には何があるんですか」

〝魔道士ギルドがある。そこならある程度融通が利くし、お茶でも飲みながら、これからの君の話をしようと考えていたんだ。もちろん、君が良ければだけどね〟

彼が魔法を使うのは俺も知るところなので、魔道士ギルドの名前が出てもなんら不思議だとは思わなかった。……商人ギルドや冒険者ギルドがファンタジーの定番だけど、やっぱりあるのかな。

浮わついた思考を、一度振り払う。第一の目的であった服は一時的とはいえ達成し、次の見通しが無い現状をどうにかしたいと歩きながら考えていた俺は今、生きる指標とも言える何かを得たいと望んでいる。そして俺はそのヒントを、彼との対話に求めていた。

「それで、何も問題ありません」

〝そう、助かるよ。じつは長旅の後でかなり金欠だったんだ。保存食はまだあるけど……味がちょっとね〟

「にゃー、にゃー！」

いつの間にか彼の肩から下りていた黒猫が、先に歩いて鳴いて呼ぶ。

立ち話は非合理的、話はギルドに着いてからにしてくれよ。そう、猫に咎められているような気がしたのは顔を見合わせた隣の彼もきっと同じだったようで、二人は小走りで黒猫の後を追って、コロッセオを思わせる立派な外観の、魔道士ギルドの中へと入っていった。

魔道士ギルドの中には、二種類の人間がいた。各々のローブを着た魔法使いと、統一された制服を着る人達だ。

周りの視線を浴びる中、受付へと真っ直ぐ向かうと、眼鏡を掛けた制服の男が顔を上げた。

「ん？黒猫の魔法使い殿じゃないか！噂はかねがね、退屈しない旅のようだな。今はトルリッカに来ていたのか。……そうそう、最近は新

人も少なくて手が足りなくてな。頼みたい依頼があるんだが、どうだ？」
〝先約があるから、その後なら。それと部屋を一つ貸して欲しい。あと、バロンさんはいる？〟
鉄砲水のように溢れてくる言葉を軽くいなす彼は、とても手慣れていた。
「分かった。部屋は応接室が幾つか空いているから案内させよう。それとバロン殿は、休暇中にたまった書類仕事に追われているので、会ってもいいが面倒事は増やしてくれるなよ。我免罪符を得たりと、張り切り出すからな、あの人は」
〝あははは……。ありがとう、頼むよ〟
「では引き継ぎまして、私がお二人を応接室へご案内致します」
綺麗なブロンド髪の女性に案内された部屋は、寛げるだけの広さのコンパートメントのような、椅子と机があるだけの部屋で、南向きの窓から採光している室内には、独特な空気感があった。
「直ぐにお茶をお持ちします――私は扉の外で控えさせてもらいますので、いつでもお呼び立て下さい」
お茶の味は複雑で、これが美味しいのかは分からなかったが、胃に温かさが染み入って心地良いと感じた。
二人とも、喉を潤したところで。彼は開口一番、簡潔に言い放った。
〝君は魔道士ギルドに入った方がいい〟
「それは……何故でしょうか。詳しく聞かせて下さい」
〝そうだね。理由は三つある。第一に、君には魔法使いになれる素質がある。……今は裏側に潜めているようだけれど、君からは初めて会った時から精霊の力を感じていたんだ。精霊と契約――絆を結ぶのは、誰にでも出来ることじゃない〟
「そんな馬鹿げたこと……失礼。その、受け入れがたい話ですね」
〝心当たりは……、ありそうだ〟
「……どうでしょう」
俺は彼の詮索に口を歪めて奥歯を噛むと、お茶の残りを口に含んだ。風味は好きだけど、このエグ味は好きになれそうにない。

〝第二に、魔法使いには資格が必要になる。素質があるって、さっき君に話したよね。資格は公的なという意味で、魔道士ギルドに属することでクリア出来るんだけど、稀に魔道士ギルドの外部で精霊使いが生まれることがある。そういった精霊使いは魔道士ギルドに属して魔法使いになるのが一般的だけど、拒否した場合、魔道士ギルドに追われることになる。……精霊の力を研鑽すれば強力な武器にもなるし、一個人がその力を持つには、当然責任が伴うんだ。分かるよね？〟

俺は彼の言うことを十分理解することが出来た。

その上で。俺は息を大きく吸った後、勢いよく机を叩いて立ち上がった。

「そんなのは冗談じゃないッ！人権を何だと思ってるんだ！こんなところにはいられない、俺は帰らせてもらう――――って言ったら、こうなるんですね」

扉の外に控えていると言っていた女性が、白い布を筒状に巻いて縮めた物を手に持ち、宙に放ると、それはどういう理屈かは不明だが、まるで無重力かのようにふわりと布が広がっていく。おそらくは、魔法の一種だろう。それが、俺の周りを包囲した。

〝彼はこちらを試しただけだから、その拘束具はしまってほしい〟

「抵抗の意思を一度見せたのです。何も問題は無いでしょう」

不敵な笑みを浮かべた女性が白い布を波立たせると、俺の一瞬の抵抗を押さえつけるよう上から布が巻きついて、ついには手足の自由を奪われてしまった。

〝一般人の彼に拘束魔法の行使は越権だ。今すぐ拘束を解かないのなら、中央本部へ報告させてもらう〟

「一般人だと？ハッ、黒猫の魔法使いが聞いて呆れる。精霊の力なら、ヤツから私でも感じ取れるというのに」

その嘲笑には、人間のドロドロとした、負の感情が多分に含まれていた。『黒猫の魔法使い』殿は、一部には蛇蝎のごとく嫌われているらしい。彼は対照的に、平静の声音のままなのが、彼女の神経を逆撫でしている。

〝彼は一般人だ。まだ、ね。じゃあ最後に聞くけれど、君は拘束を解く意思が無いと、そう判断していいのかな？〟

言葉の真意を探り会う、永遠のようにも感じる沈黙の後、その沈黙を先に破ったのは俺を拘束している女性の方だった。

「……くっ。覚えていろ」

俺を拘束していた布が膨らんで緩み、足元に落ちると、巻き尺のように女性の手元へと帰り、白い布は元の筒状の姿に戻っていた。

俺の理解の外側で、どうやら決着がついたらしい。テンプレートのような捨て台詞には、悔しさが滲み出ていた。……ちょっとした俺のイタズラな思いつきが発端で、彼女には悪いことをしてしまったと、少しだけ罪悪感が湧いてくる。

〝ちょっと待って〟

「……まだ何か」

〝お茶のお代わりを注いでくれないだろうか〟

「ーーッ、自分でやれ!!」

ティーセットを乱暴に置いた彼女は、置き土産に彼の頬にビンタを食らわせると、扉の外へと出ていった。

「意趣返しのつもりで殴られてたら、釣りが合わないんじゃないですか？赤くなってますよ」

彼と自分の器にお茶を注ぎながら、最後の一言は余分だったと笑いかけると、笑顔な彼はお茶を一口飲んで頬を擦った。

〝確かに。ただし、お釣りは多く貰ったよ〟

「え？」

〝彼女は今感情的になって、見張り役を交代してもらおうと、理由を考えながら廊下を歩いている。……つまり、代わりの誰かが来るまでの五分から十分程度の時間、ギルドの中で僕達の会話と行動を把握している人間はいなくなる。そして、その空白は揉み消されるだろう。まさに、価千金だね〟

見張り役が交代するなんて、扉の向こう側で起きていることを見てきたとでも言うのか？と疑問に思うが、しかし彼には謎の説得力があった。

俺はこのとき、鳥肌が立つのを抑えることが出来なかった。――――
やはりこの魔法使いの男は、普通とはかなりズレている。
〝ちょっとだけ、冒険してみようか〟
いつの間にか、彼の肩にはあの黒猫の姿があった。

◆

「君は、魔法使いになりたいのか」
「はい」
ここまで案内してくれた黒猫を連れた魔法使いの彼の紹介で、俺はギルドマスターの、バロンというライオンの容姿をした亜人に魔法使いになる際の面倒を見てもらう手筈になっていた。
部屋に入れてもらい暫く、ギルドマスターの彼は書類の手を休めることなく、俺に質問を投げ掛けてきた。
「うむ。では、君は何か好きな物はあるか？」
「好きな物、ですか？好物は淡白な味の川魚とかが好きですが……」
「そうか、私も川魚は好きだよ。釣りをして、自分で採った山鱒の味は、格別だ。川魚は、君を夢中にさせてくれるものかね？」
「いえ、違うと思います。好きですけど、意味が違ってきますね」
「ほう、そうかね？」
事務処理の手がピタリと止まって初めて目が合うと、彼の獣の眼光をみて抱いた感情は、恐ろしさよりも優しそうだ、という感想が先行した。だが、怖いものは怖い。口を開いて歩み寄られたら、真っ先に逃げよう。
「うむ。自分なりの答えを持っている者の目をしている。……それは魔法使いになってからも、大切にするように」
「はい」
「よい返事だ。魔道士ギルドは手段であり、必ずしも答えでは無い。目標を見失っても正してくれる良き友を、学校で見つけてくるといい。推薦状は私が書こう」
「え!?ちょっと待ってください。学校って、魔法使いになるには学校

に通うんですか。初耳なんですけど」
「ワハハッ、愉快。彼からは学校の話は聞いていなかったのか。私は推薦状を書き、馬車の手配を頼まれたのだ。なに、学校といっても年齢や種族の制限は無いし、早ければ二年で卒業だ。しっかり基礎を学ぶのだぞ」
「その、遅ければ……？」
「……五年目には研修生として、ギルドで一定期間働くことが義務付けられている。そしてそのまま職員になる者も、少なくは無い」
　聞いてはいけないことを聞いてしまったような気がした俺は、後ろめたさから急いで言葉を取り繕った。
「と、とにかく、頑張って勉強します。バロンさん、ありがとうございました」
「推薦状を君に渡そう。宿はこの紙に書いてある場所に泊まってくれ。朝には馬車が来るよう手配しておくので、この後準備が必要なら人も付けよう」
　蝋封が施された推薦状と共に渡された紙には、走り書きで宿の名前と簡単な地図が書かれていた。癖のある字をしていて、俺にはとても読めそうになかった。
「……一人では心配なので、お願いします」
「分かった、この後は受付の前の適当な椅子にでも座って待つといい。では達者でな」
「はい、本当にありがとうございました！」
「行ったか……」
「そうですね。では、遅れた分の埋め合わせをしていただかないと、我々の業務も遅れますので。集中してください」
　少年と入れ替わるようにして部屋に入ってきた彼の冷笑が、部屋の温度を四度ぐらい下げたような気がする。
「ああ……急ぐさ。急ぐとも」
　髭を指先でピンと弾くと、ペンを握って書類に向き合うのだった……。
〝バロンさんはいい人だったでしょ？〟

椅子に腰を掛けて、俺を手助けしてくれる人を待っていると、今さっき外から戻って受付で報酬を受け取っていた黒猫の彼が声を掛けてきた。知り合った仲だから、気にかけてくれているのだろう。
「はい、魚の話から始まって、学校の話を聞きました」
〝今依頼を受けてきたから、君の門出を手伝うよ〟
「あ、依頼になってたんですね……」
もし依頼を受けてくれる魔法使いが誰も現れなかったら、どうなっていたんだろう……。不安を押し殺して、バロンから受け取った地図をさっそく彼に渡した。
「そこが泊まる宿だそうです」
〝うん、大丈夫。依頼内容を口頭で確認しているし、地理には明るいから安心して〟
彼は黙って紙を折り畳んでポケットにしまうと、必要になりそうな物を挙げて店へと連れて行ってくれた。
借りていたローブは宿屋で彼に返した。このローブにも慣れて、愛着が湧いたような気がしたが、脱いで畳んだものを冷静に見ると、それは気のせいだったと分かる。
〝それじゃあ、今日は早く寝るといいよ〟
「ありがとうございました。さようなら」
宿屋の固いベッドに寝転がり、夕食も済ましてから時間が経っているのもあって、俺は直ぐに眠りについた。
何も夢をみること無く、目覚めた朝。俺は新しい服に袖を通すと、外から俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。手配していた馬車が来たのだろう。階段を上ってきた宿屋の娘にも案内を受けて、俺は宿屋を後にした。
「シュンリさーーん！おたくがシュンリさん？」
「そうです」
「若いね。魔法使いになるのかい」
「ええ、お名前を聞いてもよろしいですか？」
「俺はアーロンだ」
「よろしくお願いします。アーロンさん」

「おうよ！荷物早いこと乗っけて出発するぞ。それだけか？」
「はい」
俺はトランク一つに納めた荷物を馬車に載せて、それからは適当に座る場所を作り終えると馬車は動き出した。
「ノクトニアポリスは凄いところだぜ」
「……はい」
あれからかなり走って、馬を休めていると、彼は行く先のノクトニアポリスについて色々と話してくれた。それは為になるし、感謝すべきことだけど、馬車の揺れに酔った俺は、相槌を打つよりも今は深呼吸をして悪い気分を落ち着けていたかったのが本音だ。黒猫の魔法使いが早く寝るといい、と言った真意が分かったかもしれない。
「そろそろ見えてくるぞ」
「あれが、ノクトニアポリス……！」
俺も馬車に慣れてきた頃。馭者の男が後ろの俺に珍しく声を掛けてきた。言われて馬車から頭を出すと、これまでにいくつかの町を見てきた、そのどれにも引けを取らない繁栄と美しい景色が、目の前にはあった。
この美しき魔法の神秘は、信じられないことに、人間の手によって御されているのだ。そう思うと、感動で体が震えてくる。
「アーロンさんありがとう！最高だよっ！」

「くだらないわ……こんな醜い世界、早く終わってしまえばいいのに」
「んふふっ」
「何よ……あなたが私を笑うのかしら？」
「いえいえ、それは邪推ですよ。貴女と私は利害が一致しているのですから」
「……そうね」
「耳を澄ますと、聴こえてくるんです。世界が壊れていく音がね」
「大層詩的だこと。もう行くわ」

「――んふふっ、いい音色だ」

４話　色眼鏡三景モノクローム

「魔法使いになった諸君に、私から言葉を贈ろう。よくぞ成し遂げた、おめでとう！」

憎々しかった教官の不意打ちな笑顔に、偉大なる賢人達の石像が立ち並ぶホールの空気が、一瞬にして凍りついた。あの教官の表情筋は死んでいる、と誰もが信じて疑わなかった冷血漢が、目尻を垂らして白い歯を見せているのだ。誰だって、我が目を疑う。

そんな空気が、教官にも伝わったのだろう。

「……気持ち良く終われるよう、世辞の言葉を幾つか考えていたのだがね。……気が変わった」

こめかみに血管を浮き上がらせて震える彼の男がいつもの調子に戻ると、場を支配していた氷は溶けて、違った緊張感が走り抜ける。馴染み深いこの感覚も今日が最後だと思うと、しみじみと感じるところがある。……魔法学校での四年間を薔薇色の青春と呼ぶには、少し、刺激的過ぎる毎日だった。

あれは一年目の折り返しの時期だったか。就寝が同室だった歳の近い二人が、同じ日の夜に脱走したことがあった。

二人とは、良好な友人関係を築けている確かな手応えを俺は感じていた。苦しいときも仲間がいるからこそ、弱音を吐かずに頑張れた。……そう思っていたのは俺ばかりで、一言も相談すること無く二人は親元に帰っていったのだと、頭で理解したときの寂しさたるや。恨み節を呟きながら、一人枕を濡らした夜もあった。

それからの俺はというと、虚しさで空いた心を埋めようと、脇目も振らず魔法の世界にのめり込んでいったのだ。魔法にのめり込んでいたからこそ、一年目は力不足で二回生への進級に失敗しても、俺の心は挫けることがなかったのだと、今になって思う。

コンプレックスは、人を脆くする。進級試験の前後では、がらりと変わる人間模様と、何かしらの事件が起きるのが常だった。特に『合成魔獣事件』では、俺も他人事では済まなかったのだからゾッとする。

一、二と色々あったが、三回生にもなれば、教官の殺人的な扱きに

も慣れてくる。あの日は徹夜明けで、天気が気持ち良く晴れていたので気分転換をしようと思い、中庭の木陰でリラックスしながら考え事を始めると、初めて精霊の声が聞こえてきたのだ。
『もし……もし……きこえていますか』
「?えっ……痛ッ」
　不意に声を掛けられて、俺は木に頭をぶつけてしまった。ズキリと痛む箇所を手で押さえながら、声の主を探してみたが、辺りを懸命に見渡しても声の主が何故か見つからなかった。
　疑問は残ったがただの気のせいだと決着をつけ、このことは忘れてしまおうと別のことを考えだしたところへ、まるで耳元で囁くようにまた、あの声が「もし……もし……」と聞こえてくる。
　疑問が確信へと変わり、今度ははっきりと聞き取れたそれは、知らない女性の声のはずなのに、とても馴染み深い声のようにも感じたのが不思議だった。
「どこにいる」
『クスクス……可笑しな人。私はずっとここにいますよ。どこか、分かりませんか?』
「俺の……中から?」
『正解よ♪えらいえらい』
　……勘が当たったのを褒められて、ほんの一瞬嬉しくなった自分が恥ずかしくなる。どうやら俺は、からかわれているらしい。
「……今のが馬鹿にされていることぐらい、分かるつもりだけど」
『違うわ?可哀想に……心がいじけてしまっているのね』
　赤面しながらも、なんとか男の面子を保とうとしているところを一言で軽く一蹴され、続く彼女の俺を哀れむ声音には、茶化しの無い真剣味を帯びていた。
　俺からすれば今日が初めての、声だけが聞こえる誰かに、思いの外正鵠を射られた上に憐れまれたものだから、悔しさでつい嫌味が零れる。
「なんて可愛くないヤツだ、誰なんだよ……コイツ」
『ムッ。小声で言っても、言えてなくても、思っていることは全部聞こ

えているのよ。……私、今のでとても傷ついたわ』
「変な言い回しだな。それって、つまり……」
　正体不明の誰かが何なのか、その正体に心当たりがあった。それを確かめようとするのを遮って、上から被せる彼女の声が頭に響いた。
『考え事？見下げ果てた根性ね。一もニもなく謝ってよ!!』
「ごめん、今のは俺が悪かった！君の姿は見えないけれど、声はとても綺麗だし、その。そもそも、見ず知らずの俺が言えたことじゃない。酷いことを言ってごめん……。それで君はもしかして、精霊なのか」
『……正解よ。でも、大声に出し過ぎね。今度からは心の中だけで話しましょう』
　焦った俺とは裏腹に、冷静に大声を指摘してきた精霊な彼女。その気配が遠退いたような感覚があった。けれど、今朝には無かった精霊との繋がりを、今は感じることが出来ている。
　スピリチュアルな学問だった精霊使いの知識が体験と初めて合致することで、今までぼやけていたピントが合ったような快感が駆け巡っていた。
「あの……今の大きな独り言は」
　廊下がすぐ側にある、中庭という場所だったのがまずかった。変だと思っても見て見ぬふりをしてくれればいいものを、先の精霊との会話に反応し、話し掛けてくる人の姿があった。
「その学帽、君は一回生の子だね。俺はシュンリ、三回生だよ。君の名前は？」
「ルカです」
「そうか、うん。お互い自己紹介も終わったし、それじゃあルカくんの疑問に答えてあげよう。……さっきはね、精霊と対話をしていたのさ」
「え、それって凄い！――ですっ。精霊との対話はとても難しいって、その、聞いています」
　後輩の尊敬の眼差しは、俺の自尊心を満たしてくれる。いい気になった二枚舌が自分を飾ろうとするのをグッと我慢し、謙虚さこそを美徳とした。

「恥ずかしながら、出来たのは今回が初めてのことでね。不慣れなものだから、心の内だけでいい声をつい、外に出してしまったってワケさ。……これでさっきの独り言に、説明がついたよね？」
「はい。話してくれて、ありがとうございました」
「それじゃあ、右向け右をして戻るんだ。いいね」
彼はこの場を、にこやかに立ち去っていった。
その日の翌日に、俺は不穏な噂を耳にすることになる。なんでも、精霊にへつらい謝り倒す『精霊使われの三回生』がいるらしい……と。廊下での嘲笑混じりの噂話が、耳元でこだまして聞こえてくる。昨日の今日で心当たりしかなかった俺の心境は、悔しさと恥ずかしさから来る憤りで、やるせない気持ちをもて余していた。
所詮は一過性の噂話と言えども、あのとき、純粋そうな下級生を適当にあしらって帰したことを、後に何度後悔しただろう……。俺は彼にどこから独り言を聞いていたのかを確認した後に、他言無用だとキツく釘を刺しておくべきだったのだ。

◆

「――悔しいか。だが、今のお前達は既に私の生徒ですらない、取るに足らぬ新人魔法使い。私に意見する資格さえないのだ。どうしても文句を言いたいのなら、貴族階級のパトロンを味方につけ、魔道士ギルドに苦情の手紙でも書いてもらうといい。何故なら、この先お前達が魔法使いとしての地位で私と対等に話せるようになることは、万に一つも無いからだ。以上、解散！」
教官の長い激励の言葉も終わり、横を見れば憔悴した顔がチラホラと。生真面目な同期の魔法使い達に軽い挨拶をしながら建物を出れば、一面の分厚い曇り空が重く、頭を上から圧しつけてくるような天候であった。
首元をボタンで留めたローブの下が、風が吹くと靡いて鬱陶しいので、内側から指で摘まんで抑えつける。早足で向かった先の宿屋の女主人の前に立ち、約束をして一時的に預かってもらっていたトランク

と、バケットを受けとると、代金を払って馬屋へと向かった。
　しばらく歩いて着いた馬屋には、牝馬の手入れをしている馭者の若い男の姿があった。少し早すぎたらしい。
「こんにちは、今はまだ忙しいですか」
　既に一度顔を合わせて話も済んでいるので、振り向いた彼は驚くような素振りは見せず、俺を確認して小さく頭を下げた。
「あー、すみません。……困ったな。すぐには片付きそうにないんで、もうしばらく時間を潰してててください」
「では、私は先に馬車の中で休んでいます」
「はい、それじゃあそこのに乗っててください。終わったら、声をかけますんで」
　まだ馬の繋がれていない馬車に乗り込んで、トランクを枕にして寝転び、懐から精霊のカードを三枚取り出した。カードに少しだけ魔力を込め、目の前にかざすと、精霊の気配が近づいてくる。
『時間が出来たから、君達の話を聞かせてよ』
『マスターノ生マレタ、異世界ノ話ガ先ダ。ソレガ自然、求メラレル当然ノ対価デアロウ』
『ええっ。昨日は結局、俺ばかり話してたような……』
『わたしは……マスターがそうしたいのなら。先にわたしたちの話をするのもいいと、思うよ？』
『ぶりっこちゃんは黙ってて。そうね、短くていいから何か話してご覧なさいよ。ミカヅチもそれで納得するし、次は私が話してあげるから』
『ウヌ、ソレデモヨカロウ』
『うふふ……あなたのその性格、恨めしいわ』
『あー！この話は、俺がまだ十一歳のことなんだけど。あの頃は秘密の遊び場、秘密基地を作るのが学友との間で流行ってね。友達の車庫のカバーを掛けた黒ベンツの上に基地を作って、帰宅した強面のお父さんにアスファルトに正座で叱られたり、共同墓地の横の空き地の雑草を編んで結んだ基地でゲームをして家に帰ったら服がひっつき虫まみれで、親に「全部取るまで家に上がるなッ!!」って叱られたりし

てさ。秘密基地の思い出は、大人に怒られてばかりだったな』
『まぁ！』
『バカね』
『ゲームトハ、祭ヤ遊戯ノコトカ。人ノ子ノ遊ビニモ、学ブコトハ多イト聞ク。我ノ半身モ、コノ前ハ――――』
『へぇー、そんなことが。タケミカヅチって、任されたら張り切るタイプなんだね』
『勝負トアラバ、対局ヲ見テ好機ガ訪レル瞬間ヲ待チ構エ、雷轟電撃ノ一撃デ決メル事ヲ得意トスル。故ニ、誤解モ多イ』
『タケミカヅチさんの話す言葉、重みがあります』
『話すのが遅いとも言うわね……あら、人が来るわ。私の話はその後ね』
『ほんとだ、教えてくれてありがとう』
　俺は上体を起こしてカードを懐にしまうと、服の乱れを少し整えた。
「シュンリさーん、お待たせしました。馬も繋いで出発する準備が出来ましたよ」
「お疲れ様です。なんだか急かしてしまって、申し訳ないです」
「あっはは、何を言いますやら。謝るなんて、変な人ですねー。出るんで馬車、揺れますよ」
　馬車はノクトニアポリスの石畳を馬の蹄鉄が一定のリズムで鳴らして進み、緩やかな減速をして右に左へ道を行く。しばらくして、馬は関所の前で歩みを止めた。
「中の男、積み荷を改めるので降りてこい」
「あい分かった」
「ん、お前……魔法使いか？」
　荷台から飛び下りるのと同時に予想外の質問を受けて、反応が一拍程遅れたが、俺はローブの切れ間から手を出して番兵に答えた。その手には、魔法使いを証明するギルドの紋章が刻まれた魔道具を握っている。
「成り立ての魔法使いですが。これがその印です」

「確かに。通ってよーーし！」
番兵の男が大きな声を張り上げると、馬車に乗り込む準備をしていた者達も引いていく……いつみても異様な光景だ。これも、魔道士ギルドの信用が為せることなのだろう。クエス＝アリアスで何年か過ごしているだけで、魔道士ギルドの影響力の根の深さがだんだんと分かってくる。自分はそれに属する魔法使いに今日なったのだと、自覚しているつもりだったが、つもりはあくまでつもりなだけだったらしいと、思い知らされた瞬間だった。
馬車は速やかに関所を抜け、それからは精霊との対話の続きをして時間を過ごす。馬の休憩のときには、宿屋で注文しておいたバケットの中身の、サンドイッチを馭者の男と二人で食べた。
町を何度か経由しながら向かう目的の場所は、北の森に位置するラリドンだ。まだまだ先は長い旅なので、気長にいこうと思う。

序章短編　前半

【黒猫ウィズの潜入大作戦にゃ！】

物質をカードにすることは、難しいことじゃない。

ある程度の知識とそれなりの経験、それが魔法に関わる物ならば、出来てしまうことなのにゃ。

私には一人の弟子がいて、私が黒猫の姿になってからは、彼とは師弟でありながらも人と猫の関係を装う、ちょっと不思議な間柄が続いているにゃ。

今は、道端で拾った男の子をトルリッカのギルドに連れ込んだところ。ギルドに入る少し前に弟子と打ち合わせをして、トルリッカのギルドマスターであるバロンの執務室に勝手に隠していたある物を、私が取りに行く手筈になっているのにゃ。

「では引き継ぎまして、私がお二人を――――」

来たにゃ、弟子からのＧＯの合図。肩から降りた私は人からは認識されにくい影を歩いて、バロンの執務室を目指す。黒猫の姿になっている私のことを、不審がるような職員は少ないのにゃー。にゃははっ！

あっという間に執務室の中には入れた。バロンが留守なら簡単だけど、全部思い通りとはいかないのにゃ……。ペンを握っているバロンの姿が見えてから、私は気配を殺して慎重に、気付かれることなく目的のバロン人形（サンタコスｖｅｒ．）の側まで近づけたのにゃ。ちなみにこれは私の弟子がクリスマスにバロンにプレゼントした物、無駄に器用なのにゃ。

「いかんな、集中が切れてしまった。……ん？どうして黒猫がここに」

「フシャーーッ！」

なんでこういう時に限って勘がいいのにゃ!?最悪過ぎるにゃ！私はバロン人形が大事そうに抱えるプレゼント箱のマジックテープを剥がして咥えると、急いで出口に向かったのにゃ。

「待てっ！……と、猫に言ったところで無駄か。一体なんだったのだ。……あの黒猫はたしか、彼の魔法使いがトルリッカに来ているのか」

ぬいぐるみの事には気付かない、残念なバロンだった。
間一髪の逃走劇の後は、弟子と合流しようと窓の外の石を歩いて渡りながら部屋の中を確認している。ちょっぴり怖いけど、これぐらいのスリリングは何度も経験しているからへっちゃらなのにゃ！――――見つけた。けれど部屋の中は揉め事が起きているようなので、とりあえずほとぼりが冷めるまで外から中の様子をみていると、私の弟子と目があったにゃ。
『ありがとう。悪いけど、廊下側に回って尾行して』
まったく、師匠使いの荒い困った弟子にゃ。口パクでの簡単なメッセージを受け取った私は、プレゼント箱をその場に置いて別の窓から廊下に出ると、扉の影で尾行相手が来るのを待つのにゃ。
――――危なにゃい！
勢いよく開けられた扉を辛うじてバックステップで躱し、出てきた人物を睨み付ける。まったく、教育のなってない職員にゃ！私には目もくれず歩きだした彼女の後をつけると、よっぽど怒っていたのか、ブツブツと呟く独り言から中で何が起きていたのか推察することが出来た……今は猫でも四聖賢、これでも賢い方なのにゃー。
「ああ、この失態がアナスタシア様の耳に届いたら私は、しかし。……私に気があるサリハンなら、話を合わせてくれる筈。言い訳ならなんとでも――――」
……まさか、アナスタシアの名前をここで聞くなんて。思ってもみなかった。
トルリッカに間諜を送って、何を企んでいるの？
彼女はただの末端に過ぎない、だからこれ以上の情報は見込めないだろう。そう判断した私は、急いで弟子の待つ部屋へと向かったのだった。

【真夜中の脱走】
前もって入念に調べておいた夜間警備員のルートは、既に頭の中にインプットされている。
予定では、一、二、三、四、五……来た！ランタンを持った警備員

が、何も知らずに廊下を歩いてやってくる。この警備員が通り過ぎる瞬間を俺達は祈りながら、柱の影でじっと息を潜めていた。
この学校は、俺のような人間が居ていいところでは無かった。
毎日与えられる膨大な量の課題、米粒のような小さな文字で埋まった本の十数頁を暗記しろという座学、出来なければ席を外される実技。これが毎日毎日繰り返されて、気が休まるのは食事と睡眠のときだけであった。
「辛いな」
「あぁ……」
食事のスープとパンを食べながら愚痴を溢すと、横で食べていたレックスが気の無い返事をした。……食事のときに、する話題じゃなかったと後悔する。
「このパン、スープに浸すと美味しいな」
狙っての発言かは分からないが、シュンリがパンの話を始めた。美味しそうに頬張るので、俺も真似してパンをスープに浸してみると、確かに悪くはなかった。
「実は今日、親から手紙が来てたんだ。元気にしてるか？って」
「こっちも似たような文面の手紙が一昨日にあったな。返事を書く時間が惜しくて、まだ書いて無いけど」
「ははは っ、そっかー」
「シュンリは無いのか？」
「俺？俺はその……特殊でね。親とは連絡が取れないんだよ」
「悪い……そうとは知らず。ごめん」
「いやいや、謝る必要無いって。ただ、ずっと遠くにいるだけで、二度と会えないってことでも無いし。たぶん」
シュンリが親を亡くしていたことを、俺は初めて知った。シュンリの言う遠くってのは、おそらく天国でまた会えるとか……そういう希望的なもので。そういえば、ギルドマスターからの推薦状で魔法学校に入ったのだと、前に一度話していたことがあった。今思えばそれも、親を亡くしていた境遇故だと思えば、合点がいく。
それに、俺はシュンリが弱音を言っているところを、これ迄に一度

だって聞いたことが無かった。きっと、かける思いや意識の高さが、俺とはまったく違うのだ。
そう理解した瞬間にストンと心に収まったそれらは、難解な数式を解く為の方程式のようなもので、それによって俺の思考は一つの解を導き出した。
そうだ、脱走しよう。
閃いた瞬間、憂鬱だった頭の中が、急に明るくクリアになったような気がした。
明確な目標が出来ると、普段は思い付かないようなアイデアが湯水のように湧いてきて、活力が漲ってくる。
これならいける。入念な下調べによる裏付けで、作戦の成功を確信したとき、俺の頬は紅潮し、心の底から笑顔を浮かべていたと思う。
「レックス、俺はここを脱走しようと思う。実はもう実行に移すだけで、作戦を幾つか考えてあるんだ」
「脱走か。……実は俺も、前から考えていたんだ。シュンリは？あいつには声を掛けた後なのか」
「あいつは、いいんだ」
「そうか……俺もそれがいいと思う」

◆

警備員のランタンの明かりは、道を折れて遠退いていった。その隙をついて西へ走り、外壁に辿り着く。そこで俺の得意な氷を生み出す魔法で氷山を形成し、容易く塀を乗り越えることが出来た。
後は手紙でレックスの親に手配してもらった馬車の荷台の樽の中に隠れて、ノクトニアポリスから脱出する手筈になっていた。
「……レックス様とアドニス様ですね。話は全て聞いております。さ、お早く」
町の指定の場所に着くと、優しい笑顔を浮かべて迎えてくれた男性の姿があった。後は馬車に乗って、樽の中に隠れて、そして外へ出れることが出来れば！後は何とでもなるんだ。

「良かった、いこうレックス」
振り向くと、目を見開いて絶望するレックスの姿があった。
「あぁ……嗚呼々々嗚呼ーーーッ!?失敗したんだよアドニス!!お前だけでも――――」
体当たりを仕掛けたレックスが、目の前で地面に倒れ伏して、動かなくなった。
「なんだ、もうバレてたのか」
無感情なその言葉を聞き終える前に、俺は体を反転し、全力で走り出した。それから直ぐに背に鈍痛が走り、意識が暗転する――――
「私の声が聞こえるか?」
ベッドの上で寝ていると、なんだか懐かしい声が聞こえてくるので、ふと目が覚めた。
「お父様?僕は……。うッ、頭が、とても頭が痛いよ」
とても苦しい。鉄製の輪で頭を締め付けられているような痛みに、涙が零れてシーツを濡らす。
「命があるだけでも、幸運だと思え。お前が私にあの様な手紙を寄越さなければ……今頃はきっと」
「手紙?なんのことを言ってるの。それよりも、頭が割れそうで、酷く痛いんだ。水、水を……」
「駄目だ。これはお前の罰なのだよ。思い出せないことを含めてな……もう二度と、私を失望させないと誓えアドニス」
「はい、誓います。だから、水を下さいお父様……うぅ」
「……水差しとコップを」
「承知しました旦那様。直ぐにお水をお持ちしますわ」

【五分間ファンタジー】
〝ちょっとだけ、冒険してみようか〟
黒猫の魔法使いがそう言って窓辺に立つと、フェルト生地のプレゼント箱をどこかから取り出した。……まさか、窓の外からでは無いだろう。きっと例の魔法の一種だ。
〝開けてみてごらん〟

彼から投げ渡されたのを両手でキャッチし、ドキドキしながら赤いリボンを解いて箱を開けてみる。けれど、中身は白い綿詰まっているようにしか見えず、肩透かしをくらった俺は溜め息をして少し、ガッカリした。

「あの、綿だけですけど……」

〝綿の中に、硬い物がないかな？指を入れてみて〟

言われて綿の中に指を入れてみると――――あった、確かに硬い何かがある。それを摘まんで取り出してみると、光沢のある乳白色が保護色のような働きをしていた、宝石でつくられた一つの鍵があった。

「うわっ！……凄い。言われなったら、気づきませんでしたよ」

〝無駄にこだわったからね、オーダーメイドでその鍵を作るのは、高かったよ。それはさておき、鍵は、鍵だけでは何も意味を為さない物。対となる鍵穴が無いと何も始まらないよね〟

彼は懐から一枚のカードを取り出すと、カードが眩く輝いた。光が消えると彼の手には古びた一冊の本が現れて、怪しげな文字が刻まれた革ベルトが十字に本に巻かれており、本を開くには中央の鍵を外す必要がある作りになっていた。

〝開けてみて。大丈夫、それはただの白紙の本だから〟

テーブルの上に本が置かれ、鍵を外して革ベルトを側に置く。本を開いてみると言われていた通り、白紙が続く本だった。頁を捲る、頁を捲る……。

何も無いかと思われた本には、ある頁から細工が施されていた。突然、頁同士くっついて捲れなくなった異変に気付き、分厚くなったそれをまとめて開いてみると、紙をくり貫いて作られたスペースにはめ込まれた、謎の液体の入った瓶があったのだ！

「凄い、ロマンだ……！まるでそう、ナショラルトレジャーな気分」

〝このロマンが分かるなんて、やっぱり君は見込みがあるよっ！〟

「にゃーん……」

肩を組んで叩き合う二人。彼の黒猫が呆れた鳴き声をしたような気がしたけれど、今はこの液体が何なのか、それだけが知りたくて堪らなかった。

〝それはある友人から分けてもらった香水なんだ。少しだけ、栓を抜いてから匂いを嗅いでごらん〟

俺は慎重に栓を抜き、手で扇いで匂いを嗅いだ。それはそれは、とてもいい香りで、何だか気分がふわふわと、心地良くなっていく……。

「何だか……眠くて……くぅ……」

〝よし、上手くいった。後は……向こうで……〟

「ふにゃー……」

・・・・・・。

・・・・・・。

微睡みの中で、暖かな光が君を包み込んだ。

序章短編　天上岬

それはこじんまりとした、平凡な小屋。鈍いテカりを残す外装の木材には防水の為にブルー・パインの樹脂が塗られており、それが自然に溶け込んだ景観を演出している。

唯一の光の取り込み口となる、入り口にはめられた硝子板からは、普段とは違って中の様子を窺い知ることが出来ない――謎の紫色の靄(もや)で室内が満たされているのだ。注意して見れば、扉の僅かな隙間から外気へ溢れている靄が風に流されているのが分かる。

これは、ツユカスミソウの花の香り……？なんだか複雑ね。中では今、どうなっているのかしら。

ノックの形をつくった手が扉を叩く前に、その小屋を自身の作業場にしている私の妹、ファムが目元に涙を溜めて飛び出してきた。

「お姉さまぁ～～っ！」

「きゃっ!?……どうしたのよファム。ほら、落ち着いて」

陽の光の下に出て、まるで鉱石のような輝きを湛える瞳の、目尻を人差し指の甲で優しく拭ってあげると、この子は安心しきった、ほんわりとした微笑を浮かべている。この子の笑顔はまるで花開くリリーのよう、なんて愛らしいのかしら。

妹の自立心を尊重してあげようといつも自分に言い聞かせてきたつもりだけど、こうして咄嗟に胸に受け止めてしまう私も、五十歩百歩って、ところかしら。私の方から一歩身を退いて、私に寄り掛かっていたのを足のつま先でなんとか踏みとどまった様子の妹は、一度唇を丸めて目を伏せ、それからは上目遣いでばつが悪そうにしながら、中での出来事を話し始めた。

「じつは……誰でも簡単に、服に香りをつけて楽しめれるような、そんな素敵なお香を目指して作っていたんです。でもそれが失敗してお部屋が……。私は調合の配分を間違えたのでしょうか？お姉さま」

「そうなの、そのアイディアは私も興味深いから夕食の時にでもゆっくり聞かせてもらうとして、今はとにかく小屋の中に入らせてもらうわ。私が中に入っても、扉は開けておいてね。もし気分が悪いなら、

新鮮な外の空気を吸って待っていればいいから」
「いいえお姉さま！私は平気です。ですから一緒に原因を探りましょう」
「――ふふっ、そうね。それじゃあ入りましょう」
ファム、あなたはもう一人前よ。いつの間にか、そんな勇ましい顔つきが出来るようになっていたのね。妹を成長させてくれた、奇縁に感謝しなくちゃ。
紫色の靄の中、ゴトリと重い、音がして――
これは別の話だが、この失敗から生まれたお香は後に、アウヒト香（逢ふ人）と名付けられ、その靄は＜歪み＞から異界へと流れていった。

勝手にメアレス外伝　Ⅰ

夢幻(ムゲン)でもがくアキレスが　亀を追い越した
悲しみのまにまに温(ぬる)い涙　糸を紡ぎ
想いを強さに変える　優しい魔法
羽ばたくアゲハ　今フロンティアへと至る
人と夢の　天と地の
交差する　黄昏(たそがれ)で――リフィル・

ガス灯の下、石畳には裸のトランクケース。ハーディ・ガーディの突き刺さるような音色がこの空間を縫い止めてしまったかのように支配していた――事実、吟遊詩人の演奏を耳にした多くの人が、それぞれの営みのスピードを緩めていた。

「〈ロストメア〉だな」

「はい」

ボーイアルトなその声は、先ほどまで詩を歌っていたものだ。ラギトは、孤児院に寄った帰り道に心がざわめくその音を耳にして、ガス灯にその身をぶつける集光性の虫みたく、吸い寄せられた口だった。

トランクケースには硬貨が投げられて、足を止めていた人々は、波打ち際の足跡のように消えていく。

「黄昏時に門を目指さないあたり、この前の事件か」

「ええ……僕は人を励ます夢〈ソングメア〉、似非物の〈ロストメア〉です」

「似非物、か。身に覚えのある響きだ。さておき、そろそろ帰してもらおうか」

ラギトは黒い鎧でその身を包み、暴力的な魔力を開放する。

――瞬間。

今まで絶対の整合性を保っていた〝世界〟に歪みが生まれ、油の上を燃え広がる炎のように〝世界〟が破れていく。

やがて幻は消え、頭上には黄昏前の空が戻った。ラギトの足元には糸の切れた傀儡のように横たわる人々の姿が無数にある。思ってい

たよりもずっと、多くの人質が集められていたらしいとようやく気付き、歯噛みする。
「強引な人だ……」
〈ソングメア〉は手のひらを一定のリズムで叩いて鳴らしながらラギトに向かって〝一直線〟に近づく。足元の人々を踏んでも意に介さないその様は、ラギトが無言のまま全力で殴りかかるのに十分な条件足り得た。しかし、〈ソングメア〉の鼻っ面目掛けて振り抜かれ、顔を突き抜けた拳には手応えが無く――即座に視覚情報を切り捨てたラギトは直線的な勢いを回転に変えて、裏拳と同時に鎖を展開した。今度の手応えは、あった。だが浅い。
「イテテ……流石は最強と言われるだけはありますね」
「そこかッ！」
四方から一点への、不可避な鎖の高速収束。
「〈変調（モデュレーション）〉」
敵影無しを知らせる鎖同士がぶつかり合う金属音が甲高く響き渡った。そして先ほどからの違和感の正体に気づいたラギトは鎖を棄てて門、〈デュオ・ニトル〉へと走り出した。
その速さはラギトの〝２０秒前から〟門に向かっていた〈ソングメア〉を容易く追い抜いて行った。
「化物め……アレは人間を辞めているのか」
一度目の、夢が現実になる門を越える挑戦を挫かれて、走るには重いからと置いてきた演奏道具のハーディ・ガーディを〈ソングメア〉は取りに戻らざるを得なかった。

◆

人を励ます夢である〈ソングメア〉は、元は新聞に載っていた歌劇団の広告を読んだ青年が、実物を観ることが叶わなくとも記事の比喩表現から想像を膨らませて出来た、ささやかな夢だった。
その夢が〈園人〉によって無理やり〈ロストメア〉化され、夢を狩られること無く身を潜めている内に、青年が風邪を患い、咳を繰り返す内に喉を潰してしまったのだ。
微熱の布団の中で、深く静かな絶望。青年は誰にも夢を告げずに、

その夢を諦めた。
乾いた口笛は、高らかに響く。
心に負った傷を癒すのは、時間と音楽。人を励ます夢である〈ソングメア〉には、自身の生み出す音楽で、人の体感速度を遅らせる能力を持っている。その能力で〈ソングメア〉の演奏を聞いたものは時間の流れを錯覚、整合性のとれた幻に囚われ、演奏を聞き終える頃には肉体と脳とのギャップでエラーを起こし、眠りにつく。
後は誰も追い付けない速さで、門を潜って夢を叶えるだけのはずだった――ラギトというジョーカーが現れなければ。
ラギトはかつて、二頭で互いの尻尾を噛むウロボロスのように〈ロストメア〉と喰らいあったことで、〈ロストメア〉の能力への抵抗力が一段と高い。
そんなラギトでさえも、全力で２０秒までしか視覚のギャップを埋めることしか出来なかった。だが、自身の肉体は完璧に制御しているようなので、油断はならない手合いだ。特に、自分は戦闘向きではないし、全力で門の防衛、時間稼ぎに入ったラギトを突破するには、より強い演奏の力で、脳と肉体でエラーをさせるしかなかった……例え、抵抗力の無い一般人が巻き添えで廃人になってしまおうとも。今日叶わなければ、明日は来ないという胸騒ぎがしていた。
急がなくては――ハーディ・ガーディに手を伸ばし、その甲を撃ち抜かれた。
「――ッ、くそがァ!?」
「命中かしら？我が腕ながら、私っていい勘してる～♪」
派手な銃で手遊びしている長身の女に殺意を高めていると、路地から詰め寄ってくる影を認めて冷静さを取り戻す。
「コピシュ〈湾刀〉、〈細剣〉」
「アイアイ！」
何故か無手で駆けてきた男が何事かを喚ぶと、瞬時にその手には武器が握られて、無策の体当たりが細剣での突きに変化する。
唇を濡らし、口笛を吹く。
「〈柏一葉〉　～～♪」

柏の葉を吹き飛ばすかのような荒々しい口笛は、聞いた者の思考を乱して遅く――

「だりゃあッ!!」

細剣の突きを躱した後の、本命の湾刀の素早い切り上げが胸に縦の傷をつくる。白いシャツに血の染みが広がっていく。

「殺　っ　た　…　あ　ら　？」

この男、ゼラートに〈ソングメア〉の能力は確かに効いていた。今まさに、目の前でゼラートの動きが遅くなっていくのだから。

ゼラートの湾刀の一太刀が途中で鈍らなかったのはただ、ゼラートの中で『相手を斬る』という行為は『相手を斬る』で完結する。それだけのことだった。

そして――

「繋げーー〈秘儀糸〉」

膝をついて頭を垂れ、動く事が出来ない自分に、屋根の上から朗々と魔法の詠唱が聴こえてくる。

「修羅なる下天の暴雷よ、千千の槍以て降り荒べ！」

自身の能力が解けていると気付いたのは、今更だった。

眩い光の雷槍から、目を背けて。

貫かれて焼かれる痛みを抱いて、〈ソングメア〉は光の粒子になった。

◆◇◆

「ちょうどいいところに〈黄昏（サンセット）〉。友人からの手紙をわしが預かっていたところでな。これを渡そう」

アフリト翁が机の上にありふれた便箋の手紙を置くと、私は隙間に入れた〈秘儀糸〉で手紙の封を切った。そもそも、私の友人に手紙を寄越すような質の人、いたかしら……？

「私宛に仕事以外の手紙？どこの馬鹿かしら。どれ、差出人は……懐かしい名前ね」

「そうかい。そうかい。嬉しい名前が、あったのかい」

「……ええ、そうね」

ふぉふぉふぉ……とアフリト翁は妖しい笑みを深めた。紫色の煙

を出す煙草を、美味そうにプカプカしながら――

5話　眠れる森のラリドン

「本当に、ここでいいんですよね？」
「ええ、馬車は快適でしたが、体が鈍ってしまうのはいけない。ちょうどいいウォーミングアップってところです」
「それなら……僕はここまでですね。ラリドンは、ここまでくればそこまで遠くない筈です」
　馭者の男は思案げに、言葉を選んでいる様子だった。
「王都に戻るんですよね。……どうか気をつけて、またいつか会いましょう」
「やははっ！……ええ、またいつか」
　手綱を巧みに捌いて馬車を旋回させると、街道を引き返す馬車の姿が小さくなっていく。懐から一枚、無垢のカードを取り出した俺は、眺め、また懐に戻す。
　世界には、目に見えない力が数多く働いている。魔力もその内の一つだ。無垢のカードに魔力を少し通せば、魔力は力の方向性を失って魔素となって霧散し、霊脈のありか、魔素が集まる方向へと流れていくのを知ることが出来るのだ。ただし、魔素を知覚出来ればのはなしなのだが。学校で学んだことが、今の俺の血肉になっていると実感する。
　さておき、早速森の中へと踏みいっていく俺は、キノコの魔物の横を素通りしながら、人の手が入った形跡のある林道を観察しながら進んでいく。
「平和だな」
　先ほどから魔物が襲ってくる気配はなく、見て分かる程、暢気そうな面構えをしている。それらから、この土地の陰陽のバランスがとても安定していることがよく分かる。
　俺はこの魔素で満ちた森の管理者であるギルドマスターの力量の一部に触れて感銘を受けるのと同時に、たしかな手応えを感じていた。この森なら……。
「ん？……おいおい、珍しいところから来るなァ!?その林道はもう

使ってねーのに、よくきたな！」
　リンゴを収穫していた農夫が目を丸くして、それから人好きのする笑顔で話しかけてきた。
「魔法使いですから……実戦も兼ねるつもりでしたが、この森の魔物は皆、大人しいですね。こんなことなら、正規の道からくれば良かった」
「へ～、なりを見て魔法使いだろうとは思ってたが……殊勝なヤツだな、ご苦労さん！ラリドンのギルドマスターはスゲーのよっ」
「ですね。ラリドンに来た甲斐があるというものです」
「……お前、なかなか話が分かるな。マスターはこの先道なりでＴ字に突き当たったところを右に行った先のギルドにいるか、そこの職員に聞いてみればいい。……まっ、余計なお世話かもしれんがな」
「いえいえ、ありがとうございます。それと、リンゴを二つ売ってもらえませんか？」
「あいよっ！」
　投げられた二つのリンゴをキャッチして、銅貨を支払う。すると、もう一つリンゴが飛んできて、辛うじてキャッチする。
「こいつはオマケだ」
「ありがたく、いただきます」
　リンゴを持った手で手を振って、一口齧りつく。蜜が滴り、スッキリとした酸味が堪らなく美味しかった。

◆

　ギルドは情報どおりの場所にあり、一目で分かった。問題なのは、中に入ってからだ。
「ラリドンを拠点に魔法使いの活動をしたいと思う。そこでまず、ここのギルドマスターにお会いしたい」
「何だと……貴様。ロレッタ様には会わせんぞッ！」
　受付の男がカウンターを拳で殴り、不穏な空気が流れる。女性陣はやれやれ……と呆れた様子で、遠巻きでこちらを観察してくる男の魔法使い達の目は、真剣だった。
「は？……失礼。それは、何故でしょうか」

「こほん。マスターは今、森で瞑想をしておられる。何人も、この瞑想を邪魔をすることは許されないのが、ここのルールなのだ。よって、従ってもらうぞ」
「今が無理なのは分かりました。マスターの管理者としての職分も理解しているつもりです。では、いつなら会えますか？」
「黙らっしゃい！新参者のお前の都合など知るか！この依頼を全て終えてから、話を聞いてやろう」
　横柄な職員もいるんだな、と依頼の紙の中から面白いものを見つけたのでさっと一枚を抜き取って、カウンターの上に置かれた判子で受理の欄に朱印を押した。
「勝手に判子を――」
「ルールは把握しました。ではこの『広域・森の生態調査』の依頼を受けますさようなら！」
　依頼書を別の受付（女性）に渡した俺は、脱兎の如くギルドを飛び出した。一拍置いて、周りの理解が追いつく。
「森だと、ハッ!?そんなことさせてたまるかッ！破棄だ破棄――」
「いやいやいや、駄目でしょ。職員がそんなことしちゃ」
　遠巻きに事の始終を観察していた魔法使いの一人が、言葉を発した。その鶴の一声で受付の男は小さく「はい……」と返事をして、取り上げようとしていた依頼書を横目に恨めしそうに眺めながら、事務仕事に戻った。
「さすがは、ロレッタ様親衛隊筆頭魔道士……ッ！」
「叡王からわざと降段して、今は一級魔道士らしいぜ。なぜって？本部から召集があっても、ラリドンから先に進めなくするためだよ。クレイジーだろ？」
「ロレッタ様親衛隊（ファンクラブ）からの除名権限持ってるし、ビビるのも無理ないよな。はぁ……ロレッタ様尊い」
「……ロリコンなんて、底なし沼で溺死して微生物のエサにでもなってればいいのにボソッ」
　妙齢の受付嬢の独り言が、このどよめきを締め括った。